

# 私たちにとっての「ある小さな小さな島」の話

2005年の「竹島の日」条例成立によって東アジア各地で起こったできごとは、私たちに地域から世界を考える大きなきっかけを与えました。日韓関係の歴史的な遺産の中で、現実の紛争として発火する要素があるのが竹島・独島問題です。私たちはこれから子どもを生み、育てるひとりの人間として、この問題が継続していることに不安を感じます。歴史問題や現実の紛争、新聞を賑わす事件や事故、環境、健康問題を考えるとき、自分たちでできることから参画すべきであり、三回目の「竹島の日」を明るい未来を創るために生かそうと思いました。

朝鮮半島と日本は、人類の未来を左右する核大国の大きな影響を受ける地域です。日本と、分断国である大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国を長期的な未来的な視点で考えたとき、まず私たちはお互いの話をきちんと聴き、相互理解に努め、豊かで持続可能な世界と地域のあり方を総合的に考える必要があると感じました。そのためにいろんな立場の人々の考えを共有し、伝えるべきこと、やるべきこと、なすべきことを考える座談会を開きます。

この座談会を出発点にして、日本と大韓民国を始め世界の人たちが困難な問題を話し合う場が、朝鮮半島の対岸から生まれることを願っています。

日時 2月20日(水) 開場 18:00～

会場 くにびきメッセ 小ホール

司会 助言者

堀江 研次 (財) 人間自然科学研究所研究員 交易場 修 「太陽の國出雲」編集者

南 受廷 慶熙大学平和福祉大学院 インターンシップ生 李 潤珠 韓国出身、松江市在住主婦

尹 熙竣 島根県立大学卒業、松江市在住

第一部 それぞれの人が抱えていること～東海・日本海、竹島・独島、近代史～

上田 政子 『戦争と私』(神戸と南京を結ぶ会会員・松江市)

出席者

安田 壽子 女性と子どもの民間支援みもどの会代表 境港市

金 點勅 独島守護隊事務局長 ソウル市

堤 一直 上智大学大学院 韓国経済研究専攻 東京都

鄭 睿恩 慶熙大学平和福祉大学院 国際平和学専攻 韓国・南揚州市

第二部 このままでいいのか？私たちが伝えるべきこと、やるべきこと、なすべきこと

宮森 健次 『絵本を書くきっかけと出版まで』(「ある小さな小さな島の物語」著者/奥出雲町)

・参加者のみなさんとの話し合い

文責：李 潤珠・南 受廷・堀江研次



## 南受廷

今から『私たちにとっての「ある小さな小さな島」の話』を始めます。まず司会者を紹介します。私は慶熙大学平和福祉大学大学院で国際政治学を研究している南受廷なむすうじよんと申します。今はHNS研究所でインターンシップを行っています。この地域は韓国との歴史的な問題を抱えている地域です。松江市に来て、そのいろいろな問題を抱えている人たちのインタビューをしました。そのインタビューをする中で、なぜ韓国と日本のお互いの真剣な話ができないかという問題意識をもちました。相互理解をするためには、お互いの話をきちんと聞く機会を持つことが大切だと思いました。研究所の研究者と一緒に三人が、今度の座談会を企画し、小松理事長の援助を受け開きます。この座談会が皆様とパネラーの真剣な話ができるきっかけにしたいです。

司会者は私と堀江さんです。今度の座談会を一緒にした李潤珠さんの話を聴きます。

## 李潤珠

今回南さんのHNS研究所でのインターンシップの通訳でのお手伝いを通じていろんな方と知り合ったのです。それを皆様と一緒に聞きたいという気持ちがありました。日本で愛する人に出会って、島根県が第二の故郷になりました。ただでさえいろんな問題がある国と国ですが、竹島というまた大きな問題が起きたのです。それは、結婚するときにはもちろん知っていましたが、2004年の竹島の日とその前後の騒ぎを見て、これから生まれてくる自分の子供へのたいへん大きい危険と課題を与えることになったこの状況を、そのままおいておくわけにはいかないと考えたのです。お互いを理解をするつもりで話を聴く場をつくるのが、自分の中でできた精一杯の案だったのです。

今日の座談会ですぐ解決ができるとは思いませんが、解決に近づく第一歩としてこの会がなってほしいと思います。そのために皆様のご成長とアドバイスを宜しくお願いします。

## 堀江研次

みなさまこんばんは。平日のたいへんお忙しいなかでこんなにたくさん集まっていただきまして、本当にありがとうございます。いまHNS研究所で事務局をやらせていただいております堀江研次と申します。どうぞ宜しくお願いいたします。さきほど女性二人が話しましたように、今日は皆様の話をおうかがいする会ということで、精一杯時間内に聴かせていただきたいと思います。時間的な制約もありますが、会場のみなさまを含め、積極的なご参加を宜しくお願いします。

パネラーの方々のご紹介をいたします。先ず安田壽子さん。1993年から慰安婦問題に関わって活動なさってきた方です。韓国でナムムの家という慰安婦だった方々が暮らしていらっしゃる家がありますが、その訪問活動ですとか、韓国の挺身隊問題対策協議会と交流なさる中で、女性への暴力、女性への人権を学ぶ活動を続けていらっしゃいます。今は「みもぎの会」という会を立ち上げていらっしゃいまして、国籍を問わず暴力から逃れる女性の民間のシェルター活動を続けていらっしゃいます。

金點劬きむちよむくさんです。韓国で独島守護隊の代表を務め、そのほか韓国でボランティアの博物館ガイド、そ

のほか韓国で慰安婦問題や、歴史教科書強制労働などについて、理解する活動を続けていらっしやいます。

堤 直さんつみかずなおです。今、東京の上智大学大学院で韓国についての調査研究活動を日々続けていらっしやいます。専門は韓国経済です。韓国では慶熙大学などとの交流などインタビューを中心に今まで4回、研究活動のために訪韓なさっています。

鄭 睿恩さんじよんいようんです。慶熙大学平和福祉大学院で、国際平和学を専攻なさっています。2006年から2007年にかけて、レバノンのユネスコの事務所で、インターンシップ生として六ヶ月活動をなさっていました。主な研究分野は女性難民問題と国際紛争問題です。研究だけではなくアクションもなさっている、活動的な女性です。

尹熙媛さんゆんひじゆんです。島根県立大学の卒業生です。県立大学の在学中には、日本海東海の呼称問題をメインテーマにした討論会を開いた経験があります。非常に日本語が達者な方で、いつも甘えてばかりですが、今日も同時通訳的なことをお願いしています。どうぞ宜しくお願いします。

交易場 修先生こいえきばおさむです。人間自然科学研究所が非常にお世話になっている方です。八雲村で、一人で岩を砕いて川を治したという江戸時代の男がいますが、その男の物語を調査研究して本を発行されました。その後、HNS研究所の活動の集大成として、「太陽の国 I ZUMO」の編さん活動に従事されました。今日は全体のアドバイザーとして出席を依頼したところ、無理なところを東京から来ていただきました。どうぞ宜しくお願いいたします。

それでは第一部、それぞれの人が抱えていることに移ります。日韓間で、紛争に発展する恐れがある種々の問題があります。一度にあらゆる問題を解決することは難しいです。立場によって様々な意見もあります。私たちは、第一段階としてそれぞれの国民の意見をきちんと聴くことから、まず始めようと思いました。

その様々な立場の方々意見を聴くために、ソウル、東京、また地元から発言していただける方に来ていただきました。

その中のお一人として、上田政子さんという方に来ていただきました。齢は八十を超えていらっしやいます。日本赤十字社救護班島根班員として1944年から敗戦後、1946年1月まで、南京中央大学校を使った南京陸軍病院に配置された経験をお持ちです。陸軍病院で見たこと、聞いたこととお話していただきます。その中で、韓国出身の学徒兵を挙げておられます。ではどうぞ。

### 上田政子

この看板を見まして、「小さな小さな島の話」ということで、私の出るのは間違いではないかなと思ったのですが、堀江さんの話を聴きまして安心しました。私はその小さな島で小学校時代をすごしました。隠岐の島です。私は戦時中、日本赤十字社の救護班として、その当時は赤十字救護看護婦という名前でした。島根班員として1944年、昭和19年に、いまで言えば18歳、かぞえて19歳で、昭和19年7月に中国南京へ行きました。第一陸軍病院というところに着任しまして、ここに敗戦までおりました。敗戦後もすぐには帰れなくて六ヶ月ほどおりましたけれども、南京で見たこと聴いたことについて話します。

私たちどこへ行くのか、松江を出発するときには下関行きの夜行で行くということで、親たちも見送りに来ておりましたが、どこへ行く当てもないような戦争中ですから、赤十字の看護婦とは言いながら行き先の分からないようなところに行かせるのは不安だという親もいましたけれども、下関に行きまして、道中、第一回の東京空襲というのを聞きました。下関の兵站宿舎というところで、これは軍の人たちが泊まるのですね。そして南方大陸へ行く宿泊所ですが、そこで二日間泊まってそこへ10個班が泊まりました。二百人の看護婦が一緒におりました。二日目に釜山連絡線、関釜連絡線と言いましたが、その波止場に連れて行かれましてそこから釜山まで船に乗って、釜山で一泊して、朝鮮の汽車に乗ってずーっといきました。途中、大邱とか、平壤とか、そういう名前は聞きましたが、夜中に鴨緑江を渡って、次が満州に入って奉天でした。奉天に入ってまた夕方でしたが、奉天からまた行方も分からないところに連れて行かれて天津だとか言うところを通って、車中泊もあって四日ぐらいですね。降りろということで、引率していた人は陸軍の軍属でしたけれども、揚子江を見ました。みんなそれぞれ途中で降ろされまして、最後に残ったのが島根班と富山班でした。揚子江のほとりに出まして、小さなポンポン船に乗ってついた先はシャーカン（下関）というところでした。そこから南京駅まで歩いて行って、南京駅から汽車に乗って二十分か三十分乗って、降りたら衛生兵が迎えに駅まで来ておまして、その人の後についていったら、大きな病院に入りました。

そして軍属宿舎に泊まりました。絶対に水を飲んではいけないといわれましたが、ものすごく暑くてですね、部屋はきれいだし、水道があるので、「この水ならばいいだろう」ということで、四人で泊ま

っていましたが、その水を飲んだら、一人だけものすごくお腹が痛くなって下痢をしました。赤痢でした。怖いなと思いました。そして部隊長にあいさつしまして、翌日から教育が始まったのです。私たちは赤十字の看護婦と思っていましたが、赤十字は養成をして、陸海軍に渡すのです。渡された先ではもう軍属なんです。私たちの行ったところは南京の第一陸軍病院で、その病院は南京中央大学を日本軍が接收して、そこを病院にしておりました。一週間の教育、軍人勅諭なんかも聞かされたり、結局軍属になる話をいっぱい聞かされて、この病院は、本部は名古屋市であるということ。登1630部隊と聴いて、私たちはそこから軍属ということになったわけです。そのときはあまり感じなかったのですが、そのうちだんだんと分かってくるのです。

一週間の教育が終わったら今日は南京市内の見学に連れて行ってあげるということで、島根班と富山班はトラックに便乗しまして、衛生軍曹に連れられて南京市内に行きました。南京というところは40数キロの城壁に囲まれています。門を通過して、玄武湖に行き、「まあ、いいなあ、日本ではものすごい戦争が始まっているが、のんびりしているな」なんて思っていました。それから昼食になるので、中山門、それから光華門という門に入りました。光華門で弁当を食べようということになりました。光華門に入ったら、(南京陥落時の陸軍総責任者である)松井大将が入ったといわれていましたが、門は三階建てもあるのでしょうか、そこは板でふさがれていました。ちょっと行ったところに小さな門がありまして、かんぬきで鍵を開けて入ったのです。中に入ったらやはり門が閉ざされています。通行禁止だったのです。門のそばはアシやヨシが多く、その横は斜面になっていて、なんだか妙な様子でした。それで真ん中が歩けるようになっていて、石垣があるのです。石垣に沿ってみんなお弁当を食べるために腰を下ろしました。そのときに私は遅れて行ったので、斜面になった真ん中よりちょっと上でした。そしてお弁当を食べようかなと思ったら、腰の辺りがごつごつとして、座りにくいので立ったり座ったりして、腰に触れるものを石ころだなんて思って手を入れて取ろうとしたら、その石ころがついてくる。木の根かしらと思ってみたら人骨なんです。そのときにふと、私たち子どものときに南京陥落があったのですが、それ以降、昭和12年以降、南京ではなんか変なことがあったと、ちらちら聴いておりました。そのときに、あれこれは南京虐殺のときの人骨ではないかなと思いました。斜面ですから上のほうには土がないので、頭蓋骨とかいっぱい出ているのです。右も左も。私はそのときに、「ああこれが日本軍が虐殺したというその人たちの人骨なんだ」と、ふと思いました。でも軍隊にいるから、そのときは見たことは絶対に言ったらいけないと、そのときに心に誓いました。

けれども、そのときの光景というのは今も忘れられません。そのことがずっと尾を引きまして、そして新聞にも投書をしました。それは南京では虐殺はなかったということを一部で言っているのだから、私は終戦まで南京にいて、終戦後もいろんなことがありましたから、あれは虐殺された人の人骨だという確信を持っておりました。一回、南京に虐殺があったということを言いたいなと思っておりました。そうしたら南京と神戸を結ぶ会の会長さんが、「真実は真実なんだ。あそこは虐殺のあったところだから、もっと声を大にして言いたい」ということを、朝日新聞に載せていました。私はその会長さんにお電話して「私はその虐殺と確信できる門を見ました。いまでもはっきり覚えています」と話をすると、「うちへ来て話をしてください」というので、去年の六月に「神戸と南京を結ぶ会」の人たちの集まる所に行き話をし、昨年8月12日ぐらいから、南京訪問があつて、慰霊するところがあるというので一緒に行って来ました。

行って、本当に18箇所も虐殺された地点に慰霊碑が建っているのです。20箇所になるんだということも聴きましたけど、南京陸軍病院には患者さんが五千人ぐらい入りました。奥地から来るのです。重慶などに日本軍はいっぱい入っていましたから。そういう人を迎えに行くのが、揚子江の下関です。そこに担架を持って行って、患者さんを迎えるのです。多い日は三百人、四百人の傷病兵を連れてくるのですが、慣れてくると分かってくるんですけれど、病院船と言ってもオンボロ船を改造したようなものだから、中に入ったらもう、うんこの匂い、しっこの匂い。重症患者さんを降ろして、それで亡くなっている人もいます。そういう人は衛生兵が下関に下ろして、毛布でくるんで水葬するのです。日本軍が南京に入るときには下関で、日本軍が人を並べて撃ち殺したということです。私は知りませんでしたから、日本軍はどうしてその死体を厚く火葬してあげたらいいのに、どうして日本軍は…と、ドボンと流れていく兵隊さんの遺体を見ながら悲しく思いました。

それが慣れるにしたがって、余り悲しいと思わなくなりました。死に慣れるということ。それでそういう一年、二年が経つうちに、非常に敗戦の色は濃くなってきました。学徒兵と言って、大学生で、この人たちが兵隊に招集されて、南京にもたくさん来ましたね。南京の将校の教育機関で、ここにたくさん来ておりました。軽傷病棟を二つほど受け持ったときに、一人の学徒兵ですね、いつも廊下の外を苦悶の状態でじっと見ていた。苦悶の状態。苦しんでいる状態なんですね。食事も食べられない。「どうしたの」と言っても終日黙っている。で、もう一人の学徒兵の人は、早稲田大学から来ている人がい

て、「僕は知っているんだよ。早稲田大学で一緒だったんだ。彼は韓国人なんだ。だけど早稲田にくるために日本国籍をとらなければならない。だから二つの籍をもっている。今度学徒動員で彼にも召集令状が来て、特攻隊に志願をしている。それをすごく苦しんでいる」。

私も苦しんでいる、悩んでいる人はたくさん見ましたが、あのように悩んでいる人は初めて見ました。もう、特攻隊に行って、突っ込んで死にたいという気持ち、死んだらどちらの国のために死ぬんだということを考えるんだらうなと思って。本当に私も気の毒だなと思いました。そのうちに敗戦になったのですね。日本が負けました。敗戦になって二日目か三日目のときには、朝早く出勤して夜遅く帰るんですけど、門衛所のところに、向こうに下士官候補学校があったのですが、そこから大きな歌声が聞こえてくるんです。それはアリランの歌なんですね。手拍子で楽しそうに歌う声がいっぱい聞こえてくるんです。「そうか、韓国の人たちも兵隊籍にたくさん入っていたから、その人たちの歌なんだろうな」と思って、私が受け持ちの学生もいないかな、いてくれたらいいのになと思って、翌日出勤したら、その方はきれいに布団をたたんでいませんでした。本当にほっとしました。きっとみんな韓国出身の学徒兵の皆さんが解放されたんですね。二日か三日は、アリランとかトラジとかが聞こえていましたが、それから静かになった。たぶん韓国へ帰られたんだらうなと思って、今でも良かったなと思います。でも韓国に帰っても、日本の兵隊に入ったという人はいろいろと苦しい立場になったということも聴きましたけれども。

それから従軍慰安婦のことで、昨年八月に訪問したときに、一緒に行った三十名の中に、韓国の金さんという方もおられました。日本の広島の人で三人くらい、慰安婦のことを調べている方がいまして、中山路というあの辺の街に慰安所跡があるということで、そこを訪ねていったら、その持ち主が、自分はこれを歴史的に残そうと思っていると言っていました。二階建ての赤い建物でしたけれども、三十人くらい、その当時のいろんな人がいたという話をしていました。南京には慰安所が四十ヶ所あるということでした。これから調べていくということはたいへんなことだと思いました。

それから南受廷さんに会いまして、南さんは福祉大学の学生なので、福祉のことで来ているのかと思いましたら、慰安婦の調査に来たということで、私も感動しました。なんか手助けができないかと思いついて、こちらにおられる安田さんの紹介を受けました。そこから輪に輪が広がりまして、勉強ができたのではないかと思います。

私がいた病院で傷病兵、特に鉄砲の弾が当たって傷病したという人は少なく、栄養失調、それから胸部疾患、そういう人たちが多くて、この人たちは甲種合格で来た人たち、乙種合格の人は、終戦間際では人も足りないですから三十代、四十代の人たちも第二国民兵と言って召集されてきた人たち、こういう人たち。だいたい病気でなくなっていく人たちはこの人たちですね。終戦になって火葬場が使わせてもらえなくなったんです。そうすると土葬しなければならぬ。そうすると食べ物がない。病気はたくさん出てくる。一日二十名から三十名が亡くなる時もあります。この人たちをどこに連れて行ったかという、土葬で紫禁山という山がありまして、そのふもとで埋めるわけですね。だから終戦後の人たちは、そういう中で草と木にまぎれて亡くなっている。私はこういう人たちのせめて土だけでも持って帰りたい、こういう思いで南京も一年に二回くらいは行こうかなと思っています。

日本が侵略していったところに何一つとしていいことはありませんでした。本当に戦争を起こしたらいけないと思いました。

## 南

どうもありがとうございます。私はもともと従軍慰安婦問題に関心を持って日本に来ました。上田さんとの出会いをきっかけに、戦争を経験した人間として、未来世代に伝えるべきことを、八十代という歳にも関わらず活発に活動をしているのを見て、私も島根県に来たので、この地域で私がすべきことは何かと考えたあとで、今度の座談会を開きました。

これからは発言者からお話を一人ずついただきます。皆様の手元にそれぞれの発言要旨を頂いていますが、はじめにそれぞれから発言をいただきます。では堤さんからご意見をお願いします。

## 堤

東京から来ました。堤と申します。韓国と日本について語らせていただきたいと思います。どうぞ宜しくお願いします。

まず、お手元のレジメに図が三つあります。アジアの地図ですね。②の屈辱の歴史というのをご覧ください。「韓国は独島と言ってくるが、なんなの。あんな小さな島に。もともと日本は侵略しようとか、竹島、独島にこだわっていない」という声が聞こえてくると思うのです。ですがそこには、韓国には韓国の立場があるわけです。まずこの地図を見ていただきますと大韓民国があります。上に朝鮮民主主義人民共和国ですね。周りを見てみますと、中国、ロシア、モンゴル、日本。みな韓国より大きい国ばかりということです。韓国の歴史というのは度重なる侵略支配への抵抗の歴史です。韓国のお休み

の日は一年間に十二日あります。その中で三月一日と八月十五日がなぜ祭日なのか。三月一日は独立運動の記念日です。その独立運動の相手は日本です。八月十五日、これは日本では終戦記念日ですね。黙祷を重ねて、お亡くなりになった方々のご冥福をお祈りして、二度とああいことが起きないように誓う日です。ただ韓国ではこの日を光復節といいます。日本から開放されて光が戻ったというわけです。韓国と日本の歴史の違いというのは、韓国が昔から中国や日本など強い国から攻め込まれて抵抗してきた、生き残ってきたということですね。

でもそれはちょっと待ってください。「先進国になってあんなに経済も強くて、それなのにまだ韓国はそういうことを言うのですか。今は違いますよね」、そういう意見もあるかもしれませんが、まだ韓国では続いています。一つは南北分断。朝鮮と大韓民国で二つに分かれているということです。これが日本が、大阪と東京で、東と西に別れていて、五十年前に殺しあわなければならなかった。そういうことを想像すれば分かるかと思います。

もう一つ、サンドイッチ・コリアと書きましたが、これは今の韓国経済のことです。日本は技術力が強い、中国は労働力が安くてどんどん物が作り出せる。挟まれて韓国はどうなるのか、経済がだめになってしまうのではないかと。いままで韓国はずっと屈辱の歴史を感じていました。屈辱の第一歩としての独島です。彼らにとって独島というのは、屈辱の植民地支配の前に編入されたものです。周りにあったものを見てみると、1904年、1905年と、だんだんと手足がもがれていくときだったのです。その中で独島問題があるということ、まず日本人は認識しなければならないと思います。もちろんこれは韓国の主張全部を鵜呑みに知るわけではなくて、まずそういう土台があるのだということ、理解しなければならないと思います。

二つ目ですが、②番に漁業に関する問題があります。私は東京出身で漁業に関わったこともありませんので、こういうことを申し上げるのはかえって失礼になるかもしれませんが、日本人として漁業の問題はたいへん大きい問題だと思います。どういうことかと申しますと、竹島がどっちのものかということ以外に、漁業領域をめぐる問題があるということです。昔は日本の漁船が捕まったり、日本の乗組員が拘留されたり、さらにその漁業水域をめぐる、この中で暫定水域と書かれているところは日本と韓国がお互いのルールを守って創業しようというところ。ただしここでもトラブルが相次いでいる。これは韓国側だけを責めるつもりはありません。私もインターネットの情報で調べたところですが、韓国のほうでも、これ以上規制が強まったら自分たちは生きていけないという声があります。地元の生活ということで、中央の政府が関心を持たなければならない問題だと思います。

次に私の考えですが、結論から言いますと、独島竹島どっちのものかと言いますのは、解決の難しいものは解決しなくてもいいのかなと思っています。はじめにどっちがとったという論争がありますが、学者の中でも意見が分かれています。さらに一度決まって、また新しい資料が出てきたら、それを覆すのでしょうか。私はそれに非常に疑問を持っています。ですからまず、今それで生活をしている方々の問題、例えば漁業関係者の問題、あるいは竹島独島問題で苦しんでいらっしゃる韓国にいる日本人、あるいは日本にいる韓国人の問題について考えるべきだと思います。

最後に私の実体験についてなのですが、忘れられない思い出があります。去年、韓国のソウルに行きまして、タプコル公園という日本に対して独立運動の出発点になった公園があります。そこに私はうっかりというか、避けていたこともあるのですが、入ってしまって、そこで韓国の人たちに話しかけられて、当然日本人だと分かったわけですね。もう八十歳だか九十歳ぐらいの人たちが、「よく来たね。マッコリをあげるから、青とうがらしをあげるから」と、ものすごい歓迎をしてくれたのです。そこには日本兵が韓国の群衆を弾圧するレリーフがあるんですね。韓国は確かに日本に対して怒りとか不信心もあるけれど、それ以上に愛情もある国だ。それを最後に申し上げたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

南

ありがとうございました。次は鄭イェウンさんです。

鄭

こんばんは。鄭イェウンです。少し緊張しているようですから、肩をほぐして背伸びをしてください。そして私の平和の話を聴いてください。隣に座っている方の肩をもんでください。ちょっと明るい雰囲気です。

いま私が慶熙大学院国際平和学で学んでいますが、平和を勉強すればするほど難しさを感じています。私がレバノンのユネスコにいたのですが、そのときの写真を見ながら説明させていただきます。

イラクのヒズボラという団体が兵士二人を拉致して八人の方を殺害して、イラクがそれを持って宣戦布告をしました。もともとレバノンを攻撃したのではなく、ヒズボラという団体を攻撃したのですが、それによってレバノンの方が33日間、1183人が死亡しました。

中東のパリだといわれたベイルートが破壊されて、非常に大きい被害を与えました。イスラエルの原理主義とか、イスラエルに対する憎みを知らずに、子どもたちが手足を失って、コンクリートに埋められたりしました。生命を失ったのは人間だけではなく、このように美しい地中海も同じです。イスラエル軍が地中海にある製油タンクを爆撃して、それでこのように油が 1300 キロ平方メートルにわたって油が広がりました。このような残酷な戦争が始まるのはほんの一瞬のことです。現代の戦争は軍と軍の戦いではなく、それによって民間の人が被害に遭うのが現代の戦争です。

いままでは国家の安保という名前で国を守るという概念があったのですが、最近はその中に人権を含めて、人間安保という言葉が新しく作られました。もちろん国家の安保も大事ですが、それだけでは済みません。環境、経済、福祉、人権、平和を含む多様なアプローチが必要です。そのためにいろんなチャンネルで人権問題を守っていく、国際的なモニタリングが必要だと感じます。ともに生きていく共同安保を広げていくことが大事だと思います。

このように安全保障というのは、物理的な戦いによる被害ではなく、人権問題とか、いろんな意味での被害を言っています。さきほどお見せしました血まみれの子供の写真とは違うのですが、違う角度での写真をお見せしたいと思います。

イスラエルの少女たちがレバノンに打ち込む爆弾に、メッセージを書いている様子です。この写真を見て、この中にはヒズボラへの憎みなどを書いている。この写真を見た方が、イスラエルの子どもたちは、牛乳を飲むのではなく、憎みを食べて成長してきたというふうになっています。盲目的な愛国心はこのように恐ろしいことです。このように民族主義的な感情はよい方向では国家を団結させることができるのですが、悪いことを正当化させることがあります。

いままで私がお会いした日本の方が、なんで韓国の方は独島問題についてそんなにこだわるの、と聞いたことがあります。なんで韓国の方が独島問題に敏感に思っているのかというと、植民地時代や軍国主義を思い出させるということ、それが子孫にまで知らせるといったことがあります。このような独島問題をはじめ靖国問題や歴史教科書問題は、日本の軍国主義と膨張主義の発露です。

しかしこのように韓国の中で排他的民族主義は、平和の鍵にはならないと思いますね。むしろ右翼の方々に、その活動の発露を開いてあげるといった意味が大きいと思います。このような国家間の問題になると、どういう結論になるのか、正直、誰も分かりません。日本の市民社会の中では、軍国主義や戦争に関する積極的な関心と、意思表示をする必要があります。韓国と日本関係は国家間の対立ではなく、戦争と平和に関する対立に関心を移していく必要があります。

こういうときこそ、我々はもっと想像力を作って、批判的でありながら、それを新たに考える必要があります。その一つの案として、軍国主義者に対抗するアジアの反戦平和活動を通して、それを幅広い呼び掛けにしていく必要があると思います。

新自由主義的アジアの建設が必要だと思います。それは人間的にも社会的にも豊かになって、その中で非政府間交流が広がって、その中でみなさんが活躍していくことを期待しています。人間安保とは、幅広い組織をつくったり、そういうキャンペーンを広げることであると思います。韓日間のこのような新しい未来を開くためにも国家間を乗り越えて非政府組織間の交流活動が必要だと思います。

韓国YMCAに行って担当者にお会いする機会がありました。そこで日中韓の青少年たちが、国家間の理念を乗り越えて相互理解をするための集まりをお話させていただきました。その中で日本と中国の学生は韓国の学生に比べて、若干、平和に対する思いが低いと感じた。議論を重ねれば重ねるほど、歴史的な痛みがありまして、大声を出すような場面がありました。このような討論は重要ですが、お互いがなぜ大声を出さなければならないのか。平和的にお互いに話し合える場を提供して、そこから新たな場が生まれることに意味があるのではないかと思います。今日のような座談会も私たちと皆様が相互理解するためのスタート点だと思います。

韓国では日本との話の中で、謝罪と清算をしなさいとよく言われます。私の考えでは、アジアから戦争と暴力の妄想を放棄させ、アジアに平和の共同体を成立させることこそ、辛かった植民地と軍国主義の復讐だと思っています。ありがとうございました。

南

ありがとうございました。鄭イェウンさんの話を聞いて、戦争というのは昔の話ではなくて、今の私たちが抱えている問題だと思いました。次は金ジョムグさんです。どうぞ宜しくお願いします。

金

私は韓国から来ました、日本の皆様が竹島といわれる、独島に関する研究と活動をしている団体に所属しています。今日は皆様と独島の歴史と背景について調べてゆきたいと思います。あさっては島根県が決めた「竹島の日」です。

独島は両国間において確かに大きな問題として残っています。独島のような領土問題は世界各国にあ

りますが、根本的な問題はほとんど戦争にあります。いま島根県内でもそういう話が広がっていると思いますが、独島について歴史的な話とか漁業の話はあると思いますが、これを戦争とつなげて話す方はないと思います。今日はこの独島と戦争がどのように絡まっているのかについて話をいたします。

島根県告示は日露戦争と密接な関係を持っています。1904年2月20日、日露戦争が始まりました。日本は日露戦争の前から、海洋に軍事的な要素を含めて見張り隊を作っていました。戦争が始まったときに、非常に大きな役割を果たしており、鬱陵（うつりょう）島でも三ヶ所設置されていました。この韓国の鬱陵島、日本の隠岐島、そして独島、この流れで海洋前線につながります。

この独島に見張り台が設置される中での話をさせていただきます。1904年9月に入ってから、日本の軍艦が竹島を調査するようになります。そのなかで島根県（鳥取県）の住民であった中井養三郎（なかいようざぶろう）さんも、リャンコ島の領土の編入について申請をしました。そのとき、ただ申請をですぐにできるかというところではない。内務省で協議をして告示をしないとイケない。そのとき、内緒でつくった文書が以下のものであります。

これが内閣総理大臣に送った秘密文書です。それはさきほど見せた文書はそれによって正式に竹島に編入されるようになります。みなさんもご存知の通り1905年、日露戦争まで見張り台を設置して、日本軍は勝利するようになります。その勝利をしてから独島は見張り台が撤去されるようになります。このように島根県告示は日露戦争と非常に密接な関係があることが分かります。

島根県告示まで活躍した中井養三郎さんが独島にどのような認識を持っていたのかを紹介いたします。中井さんも朝鮮の島だと信じていたと記入されています。1911年、隠岐の島に提出した中井さんの履歴書です。1923年に島根県誌に載せられた中井さんの考えです。1905年、島根県告示が承認されましたけれども、そのときに根拠として出されたのが、そこには主人のいない島だということが主な内容でした。

そのころ大韓帝国は日本が島根県告示を承認する前、5年前に鬱陵島の付属の島だということを法的に定めます。いま見てみると、石島と書いていますが、これが韓国では独島だということを示しています。日本で有名な下條正男さんが言うには、石島が竹島を示しているのではないといっています。石島については改めてお話をさせていただきます。

主に日本のほうで主張しているのは、誰も占領していない島だということです。それに対して韓国から反論すると今まで固有の領土だということを主張したりしています。

しかしこのような二つの主張はどうみても総合性がない、お互いに結びつきが難しいことです。日本の主張が、いかに矛盾があるのかということを示しています。

これはむかし隠岐島に行って、それを観察し、報告しまとめた文書です。その報告書の中には、日本の領土の北西の境界線を、隠岐島を基準にすると書いてあります。これが独島に関する日本政府の認識だと思っています。

2006年に韓国日報と、読売新聞が共同で、韓日国民の世論調査をしたものです。いま、88%と59%が、竹島に関する国民の関心度です。これをみて分かるように、両国民にとって一番関心があるのが竹島です。このように独島問題がある限り、本当に韓日両国の平和があるか疑問に持ちます。

この独島問題は解決しないとイケないと思いますし、実態的な部分から接近すると、明日にでもこの問題は解決すると思います。私がいる団体には日本の方も何人かいます。その中の方がやっているのが、従軍慰安婦問題、強制労働問題、原爆被害者問題など、いろんな問題を一緒にやっています。その方に、質問をすると、独島問題について話をすると、独島問題で話をするとき、いろんな方から、熱い視線や、冷たい視線を注がれることがないのですかと聞かれたことがあります。この方がお話になるのは、独島問題は韓日両国間の問題ではなく、歴史の事実に関する問題であるとその方がおっしゃいました。

もっとお話したいことは多いのですが、今日はここで終わります。ありがとうございました。

## 李

本当はもっとたくさんの方々、日本の竹島研究者の方々のお話も聞きたかったのですが、みなさん忙しくてそうした場を作ることはできませんでした。そこで竹島研究所の資料と、竹島を守る会の主張が書いてあるチラシが、受付においてありますので、みなさんお帰りの際には持って帰ってください。次は安田さんお願いします。

## 安田

境港から来ました安田壽子と申します。活動は今、暴力から逃れる民間のシェルター活動をしています。1903年から私はウィーン国連人権会議で、従軍慰安婦問題は女性の人権に対する大きな問題だということを契機に、従軍慰安婦との交流を続けています。今でも続けています。そしてそれが発展して、私は地元でシェルター活動を続けました。慰安婦活動をする中で私が学んだこと、私は韓国からたくさ

んのことを学びました。韓国はすごくそういう暴力に対しての法律や施策、それからたくさんの女性たちが連帯する活動がすごく、いい活動をなさっているんです。そして毎年、相互に往復しながら勉強しています。私たちは従軍慰安婦問題について活動をしている中で学んだこととして、本当に近代史を日本人は学んだのだろうかという思いがあります。

それから過去の侵略戦争の責任は、私は日本人ではなくて、日本国家だと思っています。だからこれをもって日本国家が過去侵略戦争を、責任があったということを明確にすべきだと思っています。いままでの過去の歴史と戦争責任を、私たちの代で、次の世代に伝えていかなくちやあ。ここで風化させてはいけないと思います。もう風化しています。でもきちんと近代歴史として繋いでいく。これが私たちに課せられたことだと思います。それから従軍慰安婦の中で戦時下の犠牲者というのはやはり弱い子ども、女性、高齢者たちに来ます。近年、ヘルツェゴビナの民族浄化のために集団レイプされた女性たち、そしてその集団レイプされた女性たちに、私は何十人、何百人という方たちと関わっているわけですが、女性としてレイプ、これほど人生を狂わせるものはありません。精神的に大混乱を起こします。一人の女性が人生を狂わされていいのでしょうか。これは従軍慰安婦の人たちと同じ気持ちです。ですからこれはあってはならないことです。

私たちは、顔もみんな大陸から来た顔です。文化も儒教文化を共有化しています。朝鮮半島からたくさん大陸文化が来ました。それを共有している私たちは、日本人ではなくてアジア民族の一人だという考えを持つことが、私はできました。ですから、過去のことをいろいろ学んでいく中で、いま竹島問題が大きな問題になっています。私は女性の人権、暴力ばかりをずっとやっていました。竹島問題に関してはこの問題をやっていく中で、これは心と心の交流をすれば、平和の交流ができますよね。竹島はアジアの財産として、平和の島として、アジアの共有のものとしたらどうかなという、これは私自身の考えですが、そういう考えが浮かんできています。現在、これからいろいろな交流をする中で、私自身がやっていきたいことは、物事を解決する中で、暴力では物事が解決しないということです。さきほど大きな声を荒げることがありましたが、話し合いの中では大きな声は出ないと思います。それは暴力を消すことにつながるわけです。

虐待で、たくさん子どもや女性たちが精神的に病んでいく中で、私は暴力って言うのを、どう無くしていくか。家庭の中で暴力があれば、それは社会、学校に広がります。社会が暴力を、こんどは世界につながります。最初は家庭の中の問題だと思っています。一人ひとりが相手を尊重しあって、相手を認め合う、それが一番の平和のもとになるのではないかと考えています。

最後に、小松社長にこの間お会いしたときにとってもいいことをうかがいました。加害者と被害者が同じ土俵の上で、話し合いの場をつくる、これは大切なことではないかと思っています。自分は加害者だ、自分は被害者だというのではなくて、同じ土俵の中で話し合う、これも話し合いってことがいかに大事かと思っています。私たちは韓国からたくさん学んでおります。向こうは女性団体連帯がしています。日本は女性団体が連帯できないのです。これは韓国の女性たちは、植民地化というハングリー精神があるからです。だから仲間と連帯をして、政治を変えていっています。私はうらやましいと思います。韓国は女性が何人議員になりなさいよというクォータ制をとっています。アジアでは韓国が初めてです。そしてたくさん暴力に対する法律と施策ができております。私たちは韓国から女性団体を招いてシンポジウムを予定していますが、学校教育カリキュラムに暴力防止教育をきちんと入れております。デートDVということで暴力防止教育を教育に入れている。これを私たちは韓国から呼んで、それをぜひ日本で取り入れたいなと思っています。

竹島問題に対しては大きなお話はできないのですが、本当に心と心を通わせる交流が本当の幸せの源ではないかなと思っています。ありがとうございました。

## 堀江

安田さんには今日初めてお会いしたのですが、非常に熱いお話を聞かせていただいたと思っています。では8時25分まで、ここに出席しているみなさんのご意見を伺いたいと思っています。最初に発表していただいた堤さんから総合的な意見をひとこといただきたいと思っています。

## 堤

特に金チョムグさんの発表の中にあつた、日露戦争のときに竹島が編入されたという話は、戦争の脅威に関する韓国の感情というのは十分に理解ができるものだと感じています。

ただしここで一つ質問をしたいのは韓国の人たちでは、竹島独島を、韓国と日本の共同統治にするのか、あるいはどちらのものにもしないというのは、可能なのでしょうか？というのは、「石島」と、独島が同じなのか、あるいは誰が先にその島を持っていたのかということについては千年以上前にさかのぼって、ウサン島という島があつて、それが独島か竹島か、というのがあつて、もうひとつの島が独島竹島なのかという議論が続いています。それをとりあえずおいて、お互いどちらの領土とも決めないと

いう考え方が、韓国の方々にはあるのでしょうか、ないのでしょうか、教えてください。

**堀江**

いかがでしょうか。金ジョムグさんどうぞ。

**金**

お話いただきありがとうございました。この資料が、これからもどんどん新しい資料は出てくると思います。これからどういう新しい資料がでて、私の考えではいかに客観性をもっているのかということに重点をおきたいと思います。しかし私は今回このようにこっちに来て発表したのは、韓国の立場が独島問題に対してきちっと決まっているわけではないのです。しかし日本が「竹島の日」条例を制定して、そちらのほうから主張しているわけですから、こちらのほうとしては資料を整理して、それに対して反駁をしていることです。

一国の領土であると思っていた島について、相手側が資料を用意して自分たちの島だと主張すると、このように反駁せざるをえないと思います。例えば隠岐島を反対にそういうふうにしたときにはどうでしょうか。

それは例えば、いま日本のなかでは隠岐島に関しては歴史的な事実に関しては日本の領土と主張していることはないです。しかし、今中国ともめている尖閣諸島の問題とかに関しては日本側が客観的な資料をたくさん集めて、それに対して反駁しているのではないのでしょうか。韓国はさきほど申し上げたように、独島が韓国の領土だという客観的な資料を用意して、韓国が領土だといっているわけではないのです。

**堀江**

金ジョムグ氏からうけたメッセージというのは、どういう資料が出てくるかというよりも、いかに客観性を持った資料がでてくるかということだということですね。韓国の立場が決まっているわけではないといわれたのですけれど、しかし「竹島の日」というアクションがあったからには、それに対してはきちんと反応をするという韓国国民としての立場を明確にされたと受け取りました。

いま、領土についての明確な立場が示されたと思うのですが、二番目に発表された鄭イェウンさんの言葉について考えてみたいと思います。イェウンさんは人間安全保障という概念について発表されました。私も初耳なのですが、人間によって共同安全保障体制をつくる、新アジアの創造ということをおっしゃいました。具体的な領土についての見解の相違がある中で、どういった形で共同安全保障体制まで導くか、イメージがいただければと思います。

**鄭**

人間安保について説明させていただきます。いままで暴力というのは国家と国家の間であったかもしれませんが、これからはそういう問題にはなれません。この一世紀間、国家と国家、民族と民族間の紛争は少なくなってきたのだけれども、実際に世界的に見ても暴力とか、それに関する被害者がますます増えているのが現状です。

さきほど申し上げたように人間安保というのが、人権、福祉、平和を含めた話です。さきほどレバノンの写真でもありましたけれども実際にそういう戦争が起きると、人間だけが被害を受けるのではなく、地中海の魚とか、そういう環境も大きな影響を受けます。

独島問題をそういう視点から見ますと、環境問題とか、そういう問題にも密接な関係があると思います。独島問題がクローズアップされることで、独島に観光ツアーが続き、その中で自然環境が崩れてしまう。そういう問題はこれから本当に考えていかなければならない問題だと思います。独島を単に領土問題にしてしまうより、お互いにどういうふうに自然を守っていくことがもっと大事ではないでしょうか。

安田さんのお話をうかがうと、戦争によって被害者加害者に分かれていますが、結局はそのどちらも戦争の被害者です。私は個人的に一人の発言から政治へ。家庭の中で平和があると、それが世界平和につながる。一人ひとりの幸せを大事にしていくことが、本当の平和の道ではないかと思います。

**南**

鄭イェウンさんの話は、もちろん独島竹島の問題は、もちろん韓国の問題でもあるのだけれども、その問題を独島竹島の立場で考えればどうなうかという意見でした。

**安田**

戦争加害者もいつかは被害者になりうるといことです。それは人間だれもそういうものを持ちえている。だから非暴力というものをみんながもう一度学ぶべきではないかと思います。それはものごとを解決するのに暴力は介入してはなりません。相手の小さな意見も聞かない。切り捨てていく。それから「ああ、あいつは」と、無視をしていく。それが学校や地域社会で、イジメとかにつながる。一人ひとりが相手を尊重する気持ちを持つことが平和につながると思う。それを大事にしていきたいと思います。竹島は環境問題もあります。環境破壊は人類も破壊します。心の環境破壊にならないためにも、一人ひ

とりが自分の心の平和を保つことがまず大事ではないかと思っています。

**南**

ご質問や意見があったらお願いします。

**金**

さきほど安田さんのお話の中では竹島に関する話がありませんでしたので、私がひとことお話をさせていただきます。日本人と竹島に関する話をしますと、どっちの国の領土であるかに対してはあまり関心がないのですが、漁業ができるように規制緩和をしてもらわなければいけないというふうに主張している人が多いのです。

漁業問題に関しては、日本と韓国が共同でやるのは問題ないと思うのですが、その背景の中には領土問題という大きなテーマがあるために、このような対立構造を作っております。韓国の場合は、漁業は放棄しても竹島は放棄できない。日本の場合は竹島を共同管理しても、漁業問題については譲れないという立場です。

この流れの中で、私は昔のソロモン王のことを思い出します。二人の母が一人の子供を争い、子どもの手を引っ張り合う。王が「子どもを分けろ」といったときに、子どもを譲ったのが本当の母でした。これと同じではないでしょうか。このソロモン王の子どもが、独島の問題ではないでしょうか。

結局、独島をどう考えるのか。漁業権は奪われても竹島を守りたいという立場と、竹島はよいけど漁業は守りたいという立場と、どちらが竹島の未来を考えさせる立場ではないかと思います。

**堀江**

ありがとうございます。非常に重要な投げかけであったのではないかと思います。極端な話ですが、韓国は漁業を放棄してでも竹島を守りたい。日本は竹島を共同管理してでも漁業を確保したい。これについてみなさんいろんなご意見があるかと思っています。第二部でそのような時間を設けておりますので、第二部で改めてお話をうかがえればと思っています。それでは約10分間休憩に入らせていただきます。

## **第二部**

**南**

これから第二部「このままでいいのか？私たちが伝えるべきこと、やるべきこと、なすべきこと」を始めます。「独島あるいは竹島は、本当に人間のものですか」という話をお聞きになって、絵本を作った先生がいます。「ある小さな小さな島の物語」という本です。宮森先生は13年前に、隠岐島の小学校で働いていたときに、学生からその質問を聞いて、本当に竹島は人間のものかという問題意識をもって、竹島は日本とか韓国とか、国家のものではなくて、竹島を島の視点でみて絵本をつくりました。

**堀江**

宮森さんは、今、小学校の先生をなさっています。島根県の奥出雲町で暮らしていらっしゃいます。奥出雲というのはご存知の方が多いと思いますが、いろんな活動が活発なところです。そこで、このお話をなさったところ、お寺で、手作りで、この本を一冊一冊おつくりになって、県内外でまったく宣伝なしで900冊売れたそうです。昨年暮れには斐川町在住の韓国の方のお手伝いを受けて、ハングル版も出版なさいました。今、受付でありますので、関心のある方はぜひ、お立ち寄りになってください。では、宮森さん、宜しくお願いします。

**宮森**

奥出雲町から参りました、宮森健次と申します。どうぞ宜しくお願いします。南さんと李さんがたまに本屋さんでこの「ある小さな小さな島の物語」をお知りになって、そのご縁で今日私はここで話をすることになりました。また今日のタイトルは書名を使っていたりして、たいへんに光栄に思っています。二人からは物語を書いたきっかけと出版までを話してほしいという依頼でした。

あらすじを話すと、ある海に浮かぶ小さな小さな島が主人公です。水もない島ですので、長く不毛な島だったわけですが、やがてそこにアシカ、それからウミネコが暮らし始めます。海の生物が満ちた、そういう島になっていくのです。ときがたち、人間がそこに立ち寄るようになります。人間はそこで穏やかに暮らしていた命を奪い始めるわけです。それどころか戦争の練習と称しまして、人間同士が互いに血を流し合うことをするわけです。

島はそれをただ呆然と見守るしかなかった。しかし島は希望を捨てないのです。いつかまた自分がたくさん命で満たされるのではないかと思っている、というような内容です。よろしかったらぜひ手にとってご覧いただきたいですし、印刷を一手に引き受けていただいているのは先ほどお話のあったお寺の和尚さんとして、今日は大型絵本を持ってきてくれまして、受付のほうにおいてありますので見ていただけたらありがたいです。

私がこの物語を書いて、友人が絵を描いてくれたのですが、それがちょうど13年前のことでした。私は小学校の教員としてそのとき隠岐にいたのですけれども、ちょうど赴任する前に一冊の本に出会いまして、それに大きな衝撃を受けました。角田房子さんの閑妃暗殺という本です。朝鮮王妃を日本人が虐殺するという、私がこの本を書くちょうど百年前に起きた事件ですけれども、その事実を私はまったく知りませんでした。その本を読むまで。韓国ではこれは知らぬ人のない事件ですけれども、それを私はまったく知らなかった。なによりもそのことに私は強い衝撃を受けました。角田房子さんはその本のあとがきで、「そのことを知らないで、両国の人は握手ができるのか」という問いかけを最後に書いていらっしゃると思います。私はその本を呼んだ直後に隠岐、しかも五箇村に行くことになったときに、竹島は五箇に所属してまして、日韓の問題を調べてみたいと思いました。書物だけではなく、自分の五感を使って調べていくことで何か見えてくるのではないかというのが動機です。

いろんな資料を当たったり、竹島へ渡られた人もいるので、そういう人たちに聞き取りをするなどして調べておりました。海も見えますから、その海を見ながらいろんなことを思うわけですね。そういういろいろ考ええたことを、友人と発行しているミニコミ誌に書き綴りまして、当時50人ばかりの読者がいましたが、その人たちに呼んでいただくということをしておりました。当時竹島っていてもほとんど関心がある人なんかなくて、いたって静かなものでした。ところが95年です。村山政権から橋本政権に代わるんです。その代わったすぐに池田外務大臣の発言がありまして、竹島は日本の固有の領土という発言がありまして、日韓が騒然とした時代がありました。マスコミは毎日、日本の反応、そして韓国の反応を流していましたし、静かな隠岐島がですね、そこに右翼の街宣車が走るという状態になりました。当然その影響は私の教室にも現れるわけです。子どもたちの口から、「あそこは日本の領土なのに韓国が占領している。とんでもない」、なんてことが上がるのですね。子どもたちはもちろん過去の複雑な経緯というのを知るよしもないのですから、大人たちの鏡として反応しているに過ぎないのです。それを聞いて、私は非常にとまどいました。ちょっと危険なものも感じました。さきほど鄭イェウンさんの話で、イスラエルの少女が弾頭にメッセージを書くというシーンがありましたけれど、あの写真を見たときに、私はあのときのことを連想してしまいました。

子どもたちにどういう言葉が届くのかなあと悶々として考えていた日々でした。ただ子どもたちがそういう激しい言葉を出していく中で、ある男の子でした。私にこう言ったのですね。じっと僕の顔を見つめていて、「先生、島は人間のものなのですか？」。

私はそのとき虚を疲れた思いがしまして、入り込んでいったという感覚がありました。この物語を作ってみようと思ったのはそれからです。数々の命、人間であれ動物であれ、弱いもの、声を持たないものから見通したら、どうなるのだろうか、それが、私がその子の問いかけに答えることになるのだろうか。そんなことを考えながら書きました。物語をあるところで発表したときに、友人が絵を描いてくれました一冊一冊手作りです。一冊一冊に自分で絵を描くのです。それで十数冊できました。それを観てくださった方にもらわれていったのですが、それが県立図書館に収められました。それから十数年経つのですが僕もほとんど本のことは忘れていたのですが、たまたま奥出雲町の友人が図書館でそれを見つけまして、これを再刊しようじゃないかと言ってくれたんです。読書ボランティアの方に声を掛けてくださって、それならみんなで作ろうじゃないかということで一冊一冊作っているということです。それが去年の夏から秋にかけてそういう話が起きて、いまは注文に応じて仲間たちと手作業でしています。

暮れには翻訳してくださる方もできてハングル版もできました。10年以上前に描いたものですから、自分が書いたという感覚がなくてでるね、もちろん鉛筆を持ったのは僕なのですけれども、問いを発してくれた少年が書かせてくれたのでしょ、アシカが描かせてくれたのではないかと思うのです。こちらが正しいから、そちらが間違っているという言葉のぶつけ合いが続いてきたと思うのです。それは大事なことだと思いますし、これからも続くと思います。でもぶつけあいとは違う道もあるような気がするのです。それは双方が一緒になって、人間って愚かだがねえとため息をつくとか、犠牲になったおびたしい命を、悲しいねといって悼むとか、そこから始まる対話ってあると思うのです。子どもの発想から生まれたものでもありますので、子どもだましといわれる方もあるかもしれないのですけれども、事実、そんな思いを共感してくださる方がありまして、せっせと絵本の作業に携わってくださる方もありますし、この本を手にとりて大切に読んでくださる方もあります。

それから子どもたちに読み聞かせをして下さっているボランティアの方とか、学校の教員とかも少なくありません。それは事実なんですね。そういう人たちが少なくないということ、僕は韓国の人たちにもお知らせしたいという思いがあります。そういうことを一つひとつ積み重ねていく上に、僕は何かがあるのではないかと思います。今日はこういう機会を与えてくださってありがとうございました。

ありがとうございました。みなさんどうでしたか。いままでは、ある小さな小さな島に対してのパネラーの意見を聞きました。机の上にある花が見えますか。その花は、ある小さな小さな島を表現した花です。その花をつくった理由は、お互いの話を聴く柔らかな雰囲気をつくろうという気持ちでつくりました。そんな気持ちが皆様に伝わるのができたらいいと思います。これからはいままでの話を聞いて皆様の感じたこととか、考えることについて自由に発言することができる時間です。質問と答えは三分ずつにします。

### 交易場

それでは会場のみなさんを交えた自由な話に移りたいと思います。ご発言の前に簡単な自己紹介を添えていただくとありがたいです。東京からお見えの渡辺さん、いかがでしょうか。

### 渡辺

はじめまして。イマジン21という劇団をやっています渡辺と申します。今から8年前に、小松社長さんのご尽力でこの松江で、中国の残留婦人の方をテーマにした「再開」というお芝居をやらせていただいていたのですけれども、じつはおととしから、再開を終えて、「地獄のDECEMBER哀しみの南京」という、妻と二人だけでやるお芝居を作って全国を回っています。去年の八月には上海と南京でも、皆さんに見ていただいたんですけれども、じつは南京大虐殺を扱ったお芝居なんです。僕は岐阜県出身で、1947年生まれなんですけれども、父親が自ら志願をして1934年に旧満州に行って、職業軍人になって、罪のない中国人を殺すという罪を犯しています。戦後GHQから戦犯として裁かれているのですけれども、僕は戦後生まれですから、戦争の体験はないのですけれども、戦争の加害の罪というのが僕たち家族の生活を覆っていたという思いがするのです。父親が夜中に突然うなされて飛び起きたり、母親に激しく暴力をふるったり、その母親は今から25年前に突然首をつって自殺をしたのですけれども、そのことの中で僕自身、やはり戦争で罪を犯した加害者の一員として、どう罪と向き合って、どう償っていくのか、そのこと無しには、僕たち家族の本当の心の安らぎを取り戻すことはできないのではないかという、そんな思いの中でこの15年間、この再開と、地獄の南京というお芝居をやり続けています。それは僕にとっては自分の家族の再生という意味も含めて、何よりも中国アジアの傷を受けられた方々、悲しみや苦しみや怒り、そういうものとどう向き合っていくか、というのが、自分が戦後に生まれた意味ではないかと思えます。

実は2001年に初めて南京屠殺 記念館を訪れたときに、小松社長さんが記念館を訪れて花を添えている写真がありまして。それに僕は感動して、日本の起業家のなかで、こんなに熱心に日本の過去と向き合われている方がいるんだということで、僕はたいへん感激しまして、今回、松江の地でこのお芝居を一人でも多くの方々にみていただけたらと思っています。おとし12月に浜田市で日本国内で初の公演をやった折に、今日の上田政子さんもお芝居を見ていただいているのですが、島根県立大学で教員をやっている中国の女性の方が見ていただいて、「日本に30年住んだけれども、加害をした人間の苦しみに、今日は触れたような気がしました」というようなことを、これに直接来てくださって。これを中国でみなさんに知らせていきたいという方がいました。僕はそんな思いで今日来ています。僕は韓国の方から話を伺ったというのが、本当、初めての体験で、本当に今日の一日は大切な一日になりました。

### 交易場

加害者としての苦しみという痛切なテーマをひたむきにお話いただいて、ありがとうございました。今日、ご家族でお見えになっていて韓国からお嫁さんに来ている木村さんの奥様いらっしゃいますか？

### 木村

はじめまして、私は韓国から8年前にここ日本にきました。韓国から日本語の勉強のためにきたのですけれども、今の主人と出会って今、女の子三人に恵まれています。何を話せばよいのか分からないのですけれども、日本に来て八月になってNHKで戦争について扱っている番組をみました。そのときに内容が、戦争が悪いとか、爆弾が悪いとか、そんな内容でしたけど、なぜそんなことが起きたか、なぜそんなことがあって、みんなが戦争に巻き込まれてそんなことになったのかという本質的なところには触れない気がしたんです。毎年八月になるとそんな内容の番組が流れるのですけれども、民放では戦争について何も言わない。お笑い系の番組がずっとあって。日本だけではなく、韓国も間違いを犯したと思います。本当に時代の流れにちゃんとした志を持たないで、私たちは自分のことばかり考えて、やってはいけないことをやって、いままた竹島のことでそれがずっと続いて、まず竹島のことも大切ですが、その前になぜ戦争があって、なぜ私たちは竹島のことで争いをしているか、それを先ず考えて、国家とか民族とかも含めて、何が悪かったか。その改めることが問題の解決の始まりではないかと思えます。ありがとうございました。

### 交易場

日本も韓国も大きな過ちを犯したのではないかという、非常に胸に刺さるご指摘がありました。

## 長田（会場から）

松江市に住んでいます長田といいます。戦争中に、斐伊川水系にダムをたくさん作られるのですけれど、そのダムの工事に韓国の方が大量に携わってしまっていて、そのことを追跡調査する活動を続けています。竹島の問題について関心がありまして考えてきたのです。金さんに質問をしたいのですが、さきほど堤先生のお話に近いのですが、現実には竹島を考えた場合、個人としては韓国の固有の領土ではないかと考えているのですが、日本の現状から考えますと、そのことがとてもではないですけど日本人には受け入れられないでしょう。あるいは韓国の方にも日本の固有の領土というのは受け入れがたい状況にあるのではないかと思います。現実的な方法として僕は一つ提案したいのですが、竹島は日本と韓国にとって非常に貴重な場所でありまして、共同で環境問題も含めて、資源問題も含めて管理していく。そういう方向しかないのではないかと考えているのです。領土問題についての認識については日韓共同で正式の研究組織を作って双方が客観的に冷静に過去の歴史を検討しあっていく機関を作って、共同でやっていく、そういうことが現実的な方向ではないかなと思うのですが。韓国としてはどういう考えかちょっと聞きたいなと思っています。

## 金

ご質問ありがとうございます。環境とか地理的な問題は共同で管理して、領土問題については学者たちが話し合っただけで客観的に考えていこうということですね。いまのお話はですね、未来志向的に見たときに非常に肯定的な考え方だと思います。しかしその提案には大きな問題点があります。その前提条件としてはやはり韓国人が考えている領土についての意識の問題だと思います。領土問題が解決すれば、環境問題だけでなく周りにもあるいろんな諸問題とかも自然に解決の入り口に立つと思います。今現状の中で竹島だけでなく世界各国で起きている領土問題は、領土問題が解決できていないため、環境問題とか諸問題が解決に向かっていないのが現状であります。たとえばさきほどお話がありましたが竹島が韓国の領土だと認定した場合は、非常に良い方向に流れるのではないかと思います。

どちらの領土にするかということを決めた上ではないと、敏感な問題を解決した上でなければ、諸問題も残っていきはざす。日本でも竹島だけではなく尖閣諸島とかいろんな問題に関わっていると思いますが、独島についてはI S J国際司法会議のところで提案を出していますが、尖閣諸島とかそういうところには提案を出していないのが現状です。諸問題に関しては韓国の領土だと島根県や日本政府が認めれば、未来的な志向で流れると思います。以上です。

## 長田

意見は分かったのですが、そうはいっても竹島が韓国の領土と了解させるとするのは非常に難しいです。はっきりさせるといって方向ではなかなか現状の解決には結びつかないのではないかと思います。実際に竹島をどうして行くのだということになると、領土問題を棚上げにして、共同管理を進めながら、日本と韓国のお互いの理解が得られるような方向で、じっくり時間をかけて、やっていく以外に、そういう方向しかなかうまくいかないのではないかと思います。

## 田中（会場から）

松江市内に住んでいます田中と申します。松江駅の近くで仕事をしていますものから、韓国のメディアの方もいらっしゃったのです。そのときにメディアの方がインタビューするのですが、松江の方はほとんど関心がないから答えない。韓国の方はそのことがすごく不思議だと感じていられました。私が「別に反発して答えていないのではないのです。何を答えてよいか分からないからです」と言うと、「ああ、そうなのですか」とほっとしておられました。たとえば竹島にしてもある学者の説を読むと、なるほど、これは日本の領土かもしれない。けれど、韓国の方の立場の学説を読むと、これはやはり韓国の領土かもしれないと、私自身もすごく揺れたのです。

新聞の切り抜きもあって、私なりに学んでいたのですが、クルド人の問題もあります。昔は国境があいまいな気持ちで、地理的な条件で暮らしていたのに、勝手に線引きをされてクルドの方たちはすごく困っていますよね。いま、日本人の学者も韓国の学者も、現代人の目線で語っているからうまくいかない。もう少しあいまいな形で領土というのを捉えていたのではないかと書いてあって、それで私もなるほどなと思って、17世紀末の外交交渉が載っているのですが、いまよりよっぽど相手に気を使っている。いま領土をはっきりさせたほうが良いという意見がありましたが、それは逆効果ではないかなと思っています。

## 交易場

近代の国民国家になってから線引きをして、それまでは海の民が自由に行き来していたのが現実だろうなと思います。韓国の人を書かれた本に、鬱陵島には韓国の人と日本人が共同で暮らしていたとも書かれていますので、やはりもう一度そういう自由に行き来した海の民の視点が竹島問題に入ったらいい

かなという気がいたします。他にございませんか。

**鄭**

さきほどみなさんの話のなかで若干疑問に思ったのは、もちろん政府方針のすべてを皆さん個人個人が受け入れることはないと思いますけれども、それに対して個人個人がはっきりと自分の意見を言うべきと思います。私が今までいろんな映画を見たのですが、自分が見た映画の中でとても好きな映画の二つが日本の映画です。日本の音楽も好きです。韓国の中で日本を良く知っている若者として扱ってほしいという気持ちがあります。

韓国にいたときの私の率直なイメージは、脱亜入欧をいう日本政府。そして、それに関心もないし反論もないし、消極的な日本の国民と思っていました。私は長い間外国で生活していて、そこで会った日本の友達に独島の話とか、歴史の話をして。そのたびに返ってくるのが、「私はそういうところに関心がない」という答えでした。日本の知識人に会うと、日本にもこうして歴史に関心があって自分の意見が言える人がいるのだなあと、自分なりに衝撃を受けました。

韓国国民も排他的な民族主義の中で反日感情を示すのは、これから直していかなければならないと思いますけども、関心がない日本国民の気持ちも直していかなければならないと思います。私が中東に行って、アメリカ人がいかに憎しみを持たれているのかが良くわかります。ブッシュのもとでそういう政策を持っていますが、結局はアメリカ人に向けて憎しみが戻っているのではないのでしょうか。

**南**

鄭イェウンさんの話は、国家と国民の間に差があるという話でした。でも、今度の座談会が意味があるのは、「関心がないということはない」ということです。関心があるので、百人ぐらいの人数が集まっている。そんな今度の座談会をきっかけに、次の話ができると思います。

(会場から)

竹島問題と直接関係がないのですが、韓国の人にお聞きしたいことがあります。島根県の海岸に韓国のごみはかなり流れ着いています。日本も多くのごみを川に流しています。日本のごみは西風に流れて日本にはあまり漂着しませんが、韓国の人にながされたごみはすごく目立つものです。そのことが韓国人のイメージダウンにつながっているのではないのでしょうか。韓国政府としてもゴミ対策に積極的に参加してもらいたい。

もう一つ裁判員制度でお聞きしたい。韓国は早く裁判員制度が始まったといわれますが、裁判員制度は日本に合わないのではないかなと思います。

**堀江**

ごみのことと、裁判員制度の二点をご質問を受けたいと思いますが、よろしいでしょうか。これについて簡潔に韓国の方でお答えいただける方がいらっしゃいますでしょうか。

**李**

島根県に住んでいる韓国人として本当に申し訳ない気持ちでいっぱいです。流れてきたごみのことで韓国人のイメージダウンにつながるのであれば、一人の韓国人の私がそういうゴミを拾うことでイメージアップにつながればと思っていますが、流れてくるごみの量にとっても追いつかないので、申し訳ございません。ただ拾うだけではなくて、根本的な解決が必要だと思います。ごみだけではなくて共同水域の漁船からでたゴミのことも分かっていますし、次の会にはそういうごみのことも考えた会を開いていきますので、またお願いします。

**堀江**

堤さん、裁判員制度について聞いておられるけれども、伺うことはできますか？日韓の比較ということですね。

**堤**

韓国の裁判員制度について私は申し上げられないのですね。

**堀江**

裁判員制度について簡潔にお答えいただける方、いらっしゃいますか？裁判員制度について韓国も始まったばかりのようです。

総合的にみてポイントになる意見として、「領土をはっきりさせてほうが平和になる」、逆に「はっきりさせないほうが平和になる」、そういう意見がありました。

鄭イェウンさんの中で、日本のイメージは脱亜だった、いままで歩んできた日本のイメージに東アジア全体が影響されているという現実もあろうかと思っています。そのことについて何かコメントがいただければと思います。

**堤**

「はっきりさせたほうが平和」、「はっきりさせないほうが平和」、日本と韓国は非常に似ているとい

いますが、違いがあるのは確かだと思います。さきほど金先生がおっしゃった、韓国は島を守りたい、日本は漁業を守りたい、それでも日本もここまで問題が大きくなったら、引けないと思います。

領土問題がありますので、竹島をなんとか平和に解決することで、尖閣諸島や北方領土にもなにか見本になるようなケースができればなど考えています。ただ意見の違いが確認できてたいへんに良かったですし、金先生におっしゃっていただいて、有意義だったと思います。

戦前の話をいいますと、私が靖国神社に行ったときの話をしたいのです。まず展示に入って映画がある、日本がなぜ第二次世界大戦に入ったかというのを、結局アメリカとか周りに追い詰められて戦争に走ったという趣旨で放映されていました。私も本当に詳しいことは分からないのですが、偏っているのではないかなと思いました。最後、特攻隊の遺書というのがあるのですね、娘と家族に宛てて頑張ってお母さんを守ってくださいという遺書があって、その人に殺されたアメリカの兵隊とかにとってもすごい憎らしい日本人かも知れないですけど、私はなんというか、生かされているのかと。

過ちも大きかったけど頑張ってお母さんのためにやったのかと。展示の映画をみた感じと、特攻隊の遺書を見て感じたこと、私は一つにはまとめ切れません。

**南**

終わる時間になりましたが、パネラーの人から、一分ずつ聴きます。

**安田**

私の父も職業軍人で、さきほどの南京の話も同感です。日清戦争、日露戦争と、過去戦争を起こしたために今につながっている。戦争を二度と起こさないことが平和につながる、それは一人ひとりの心の持ち方だと思います。

**金**

問題があれば、お互いの立場によって違う角度から考えるのが当然だと思います。お互いの立場だけを言い争えば問題の解決にはなりません。問題になった原因とプロセス、歴史的な事実を照らし合わせて、お互いに話をするべきだと思います。韓国が排他的民族主義的な考えでいまの独島の領土問題を主張しているとは思いません。今日のシンポジウムでも明確に独島が韓国の領土だとか、日本の領土だという話はなかったと思いますし、去年は鳥取県と江原道が改めて姉妹提携を結びました。そのとき鳥取県が江原道に提案しました。その提案が本当の姿ではないかだと思います。そのとき鳥取県が江原道に行ったときに、これからは独島問題については言及しないと表現したようです。

**鄭**

本日はこんなに気楽に話ができる場ができて本当に良かったです。これがきっかけになって、私をもっと日本を知るようになると思いますし、私が知らない中でいろんな活動をなさっている方がいまして非常に感心しました。この座談会がこれからもずっと続いて民間交流のベースになればよいと思います。

その地域がもっている問題、協議しないといけない問題をお互いに話し合っ、そこから未来を開いていくことが大事ではないかと思います。

**南**

今度の座談会がもちろん十分な座談会ができたとはいえませんが、今度の座談会が世界の未来を話し合った未来広場ということになったらよいと思います。短い座談会なので、次のきっかけがあると思います。次の座談会があったらぜひ皆様に紹介します。これからも日韓関係について自由な雰囲気でお互いの話をきちんと聴く場が、あったらいいと感じます。今度の座談会に対して、積極的な応援をしてくれた主催者のHNS研究所理事長からのあいさつをいただきます。

**堀江**

さきほどお話も南さんからいただきましたが、いろいろな立場の方が集った、それも「竹島の日」の直前に話ができ、こういった場ができたということでした。もしよろしければ拍手をいただければと思います。

(会場の拍手)

では、この会を主催しましたHNS研究所の小松理事長からご挨拶をいただきます。

**小松**

みなさん今日、六時半から本当に長時間素晴らしい会議をいただきましてありがとうございます。平日にも関わらず夜遅くまで、積極的な質問もたくさん出まして、非常に実り多い今日の会議が開催できましたこと、主催者を代表しまして心より御礼申し上げます。お手元のほうに東洋経済日報という在日の方が出しておられる新聞があります。1998年のものです。この中に私がなぜこのようなことをやるようになったかということが書いてあります。

「ある小さな小さな島」というテーマ、こういう本がでて、それからこういう縁ができた。こういう

流れは世界を覆うと思います。スイスは永世中立国ということをご存知の通りです。スイスを押さえたところがヨーロッパの覇権を制すということで、これは紀元前からの歴史です。有名なウィリアムテルの物語があります。自分が助けてもらいたかったら、自分の子どもの頭にりんごを乗せて、それを父親が射る。スイスは、いろんな国々に占領される、そのときに傭兵として戦いにでる。自分の子どもの頭の上りんごをおいて、それを射るということを強制される。これが苦難のスイスの歴史です。

スイスは、ドイツ、フランス、イタリアとつながっています。公用語は四ヶ国語です。このヨーロッパの国々が疲弊したときにチャンスだということで、「自分たちはどこの国とも組みしない、永世中立国ということで協力してもらえませんか」と話した。スイスがどこかの国とくつつく、そのことを一番ヨーロッパの国は恐れたわけです。ですから他の国は「分かった。でもほかの国が同意すればね」ということで、スイスは一生懸命ほかの国にもアプローチして、結果として永世中立国となったわけです。

この東西冷戦、人類が減びる可能性がある核の冷戦を潜り抜けて人類はここまで生き延びてきたわけです。そうしたときに民主主義の始まりは、ギリシアの岩の上の神殿です。中東で「嘆きの壁」があるところは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、そこでいまいろんな問題が起きていることはみなさんご承知の通りです。全て岩場であります。

そして、一国で生きられる国はどこにもない。日本の自給率は40%を切っています。我々は鉄を扱う仕事をしていますが、また20%の鉄の値上げです。値段の交渉権は一切ありません、そして油は上がる。こういう中でアメリカのサブプライムローンが世界を覆いまして、韓国も現在たいへんな経済の厳しい状況に入っています。大学卒の人が半分しか就職できない。この経済問題から、一つの島のことが発火点となって戦争が起きる、それは歴史が証明しています。

グローバル時代の日本海、韓国では東海と申しますが、世界の工場となった中国が、アメリカに大量の製品を送り出す、ほとんどが日本海を通過しています。日本海は大交流の海になってきています。近いうちには境港から韓国に向けて定期船を出すということも始まるということです。ここを、「対立の海」を終わらせて「交流の海」にする。そのきっかけが今日から始まるのではないかと、またそうしなければならぬと思って、このような会をバックアップしてきたわけです。

研究所の活動として、一つの区切りがつきまして、若い人たちが未来広場ということで、今日皆さんのご賛同を得て、次の新しいスタートが切れることを願っています。

今日、戦争の話が出ました。明成皇后の暗殺事件です。この明成皇后の暗殺事件が、伊藤博文公の襲撃につながり、そして安重根の処刑につながり、その前には王様が毒殺され、それから日本の内政化といえますか、植民地化がはじまった。こういう流れが日清戦争の後続いています。こういう流れをほとんど日本人は知りません。そして去年はその暗殺現場がソウルの真ん中に再建されました。この「竹島の日」が一つのきっかけとなって、熊本県の暗殺者の子孫の方がことわりに行って、そして新たな交流が始まっています。

いろいろとお話したいことはありますが、今日のこの日がスタートになって、この朝鮮半島の対岸、この地域だけではありません、日本列島全体が対岸だと思っています。そして道州制ということがこれを、世界の平和の州ということで、州都をぜひここに州都としてみなさんにご提案をしたい。しかしこれは一つの案です。最近テレビ会議もありますので、そして時には顔を合わせ、海外とも一緒にやっていくという流れが今日から始まりますことを願っています。今日はどうもありがとうございます。

南

ありがとうございました。私のインターンシップは26日に終わります。だけでも今度のことをきっかけで、韓国と日本のつながりになりたいという気持ちも出ました。ここにいる堤さんと鄭イェウンさんと私は、日韓の若者なんです。だから私たちから日韓関係の長期的な未来的な平和を創ることができるかも知れない。でも皆さんの力が必要なのです。

李

今日、竹島をイメージして作ったこの花があります。今日の会に来てよかった、また周りの自分の友達とか知人に知らせたいということであれば、お持ち帰りになって、こういう会があったことを知らせてください。またみなさん参加をよろしく願います。

堀江

韓国の3・1独立運動というのは、東京のYMCAで発表された独立宣言がきっかけになって始まり、それが上海の5・4運動につながったのです。2005年の竹島の日というのは、それが韓国でのいろいろなアクションになり、事実として、同じ年に上海での反日デモがありました。そういうふうに私たちの地域は世界とつながっているのだと、世界の大きな影響を受けているのだと、そのような気持ちでこの地で、この地が松江かも知れませんが、島根かも、山陰かも、中国四国かも、日本かも、北東アジアかも、世界かも知れませんが、この地で生きていくようにしましょう。今日はご参集いただきましてありがと

うございました。パネラーの皆様に、また会場の皆様に大きな拍手を送ってください。(おわり)